

バーナード・ブロックの書簡から見た日本語教育史  
Japanese Language Education History Seen Through the Bloch Papers

本研究は、言語学者バーナード・ブロックやジョージ・A・ケネディの、1930～40年代の膨大な量の往復書簡を通して、日本語教育の源流を探ろうという試みである。

アメリカは19世紀の終わり頃まで、極東の小国には興味がなかったが、米西戦争での勝利、そして日清・日露戦争での日本の勝利などがきっかけとなり、アジアに目を向けるようになった。日本研究が西海岸で始まったのもその頃であるが、日本語教育は、二、三の例外を除いて、ほとんど行われなかった (Jansen, 1988)。

その状況を一気に変えたのが太平洋戦争である。軍では諜報活動、暗号解読、降伏を促すビラの作成などを行うために日本語ができる兵士が急速に必要なになった。軍の指導のもと、コロラド大、ミシガン大、コロンビア大など、各地の大学内に日本語プログラムができ、話し言葉を中心に据えた日本語教育が始まった。

バーナード・ブロックは、開戦前は日本語に関わっていなかったが、42年から日本語を集中的に学び始め、翌年イェール大に移って陸軍特別教育プログラム (ASTP) を指揮することになる。書簡からは、当時インフォーマントと呼ばれた日本人教師の募集、指導、教材の開発、そしてアメリカ言語学会の学会誌 *Language* の編集作業など、多忙を極める日々が見えてくる。

ブロックと E. H. ジョーデンが戦時中に執筆した *Spoken Japanese* という教科書と付属のレコードに関しては池田 (2014, 2016) に詳しいが、今回の調査では、*Spoken Japanese* 出版の何年も前から日本語教育に録音音声を利用されていたこと、また、日本向けの放送のために軍が準備したレコード録音から教材を開発していたことなどが確認できた。さらに、ディズニーと協力して「日本語の発音の難しさ」などを伝える映像も作成されたらしいが、その存在は確認できていない。その他にもいろいろなものがワシントンや各地の大学に眠っているのではないかと思われるが、本校でも情報公開まであと3～7年待たねばならないものもあり、今後の研究が期待される。

今回の発表では、36年に日本語の授業をスタートさせたケネディや、戦時中の日本語プログラムを成功に導いたブロックの足跡を明らかにし、現代日本語教育の原点ともいえる時代の一面を、書簡や当時の新聞など一次資料に基づいて検証する。

学会の参加者がそれぞれの日本語プログラムの歴史を振り返り、今後の日本語教育のあり方を考える参考になればよいと願っている。